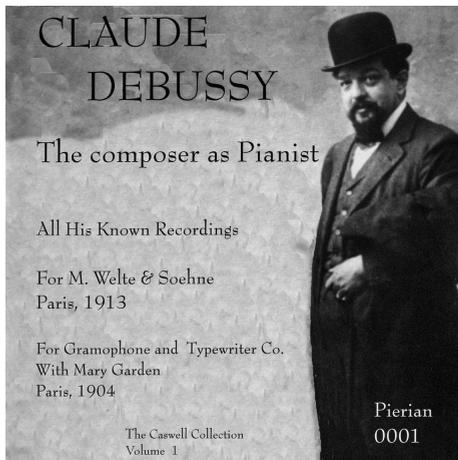


commons: schola vol. 3

Ryuichi Sakamoto Selections: Debussy

原典解説



曲名: 忘れられた小唄～第2曲 巷に雨の降ることく  
曲名: 子供の領分～第1曲 グラドゥス・アド・バルナツスム博士  
曲名: 前奏曲集 第1巻～第11曲 パックの踊り  
アルバム名: The composer as Pianist

演奏者名: クロード・ドビュッシー(ピアノ)、メアリー・ガーデン(ソプラノ) (「巷に雨の降ることく」)

録音: 1904年(「巷に雨の降ることく」)、  
1913年11月1日(「グラドゥス・アド・バルナツスム博士」、「パックの踊り」)

CD 番号: Pierian 0001 ¥2,405 (税込)  
発売元: Pierian Recording Society

(schola vol.3 CD track 1 & 8 & 9)

1870年代にエジソンらが発明した録音技術は、音楽の演奏を記録し、保存することを可能にした。しかし、初期のレコード録音はノイズも大きく、鑑賞に耐えられる品質でなかったこともあって、20世紀初頭にはピアノ・ロールが大きな脚光を浴びていた。これは記録用のピアノでピアニストに演奏をしてもらい、その際の鍵盤やペダルの動き、音の強弱をロール紙の上に記録するというシステムで、現代の自動ピアノに近い。1920年代半ばに電気式録音法が実用化され、再生音の質が大きく改善されるまで、多くの音

楽家がピアノ・ロールを好み、記録を残した。ドビュッシーもそのひとりで、当盤は彼の作成したロールを再生し、録音している。ドビュッシーは青年期に社交界のサロンでピアノ演奏をよく披露するなど、ピアノの腕前については定評があった。自在に伸縮するピートを土台に、剛柔の幅広い音楽を繰り広げた演奏は、細部における楽譜の変更も含めて、作品解釈の点で示唆するものが多い。詩情豊かな《デルフォイの舞姫》から異国趣味を採り入れた《グラナダの夕暮れ》、ユーモアあふれる《子供の領分》まで、ドビュッシー

の多面性をよく拾ったラインナツブも興味深いものだ。また1904年には歌曲の伴奏録音もレコードに残っていて、細かい音ながら実際にドビュッシーが弾いたピアノの音を聞くことができる。歌手は歌劇《ペレアスとメリザンド》でメリザンドを初演したメアリー・ガーデンである。ガーデンはスコットランド出身で長くパリに留学し、1900年にパリ・オペラ・コミック座でギュスタヴ・シャルパンティエの歌劇《ルイーズ》を主演してデビュー、以後は同劇場の看板女優として活躍した。